

第十一節 躍進続ける部活動

一、躍進続ける部活動

部活動が盛んな昭和学院には有力な部がいくつもある。幾度となく全国大会に出場し、全国優勝しているハンドボール部とバスケットボール部がある。最近一躍全国優勝等の活躍をする新体操部や体操競技部、そしてテニス部など、全国大会ですばらしい成績をあげる実力のある部が多い。

また文化部では、書道研究部が全国的に有名な賞を受賞してきた。バトン部も全国大会で数多くの賞を受賞する実力を持つ。

特に書道部の活躍は、文化部のなかでも顕著である。

夏の合宿が有名で、三日三晩集中して、展覧会用の大作を書き続ける。合宿中の苛酷な創作活動、精魂尽き果てた後に、生徒が成長する様子は皆を感動させる。

ここでは平成十三年度の部活動における成果のうち、主だったものを紹介する。

〈中学校〉

体操競技部：県大会四種目総合優勝

新体操部：県総体優勝、関東大会第五位

〈高校〉

バスケットボール部：インターハイ三位、国体三位

ハンドボール部：インターハイ二回戦出場、国体二回戦出場、選抜大会三回戦出場

ソフトテニス部：関東大会三位

体操競技部：関東大会出場、県新人戦団体優勝、選抜大会出場

新体操部：関東大会第五位、十五年ぶりのインターハイ出場

文化部の成果の主だったものは次の通りである。

書道研究部：第十回国際高校生選抜書道展、団体で南関東地区準優勝

放送部：NHK放送コンテスト、ラジオドラマ部門で県の最優秀賞

バトン部：千葉県大会・関東大会で中高ともに金賞、中学は全国大会銀賞

二、組織の変革

故伊藤一郎先生は、平成十二年度まで理事長と校長を兼任なされていた。しかしこの年度で、校長職を勇退なされ、理事長職に専念されることになった。

第十二節 伊藤一郎先生御逝去

一、揺るがぬ信念

平成十四年度から、「ゆとり教育」と呼ばれる教育制度がスタートを切った。この制度が後々どのような結果を招くのかを察知し、揺るがぬ信念のもとに、教育活動を続けた。

学力低下の懸念のため、土曜の休校は第二土曜日に限った。他の私学でも同様な学校が多かった。私学と公立学校を比べ、その後の評価を考えれば、判断が適切だったといえる。

だが、揺るがぬ信念が、固執になってもいけない。必要なものは取り入れ、変化を促すということも、時には必要である。久松英壽校長の新体制で、積極的に行ったのがフロンティアハイスクールへの参加である。平成十四年度にその決定がなされた。

さらに女子専門の教育からより普遍的な教育をめざし、より優秀な生徒を多く獲得するために、翌十五年から男女共学化を行うこととした。創建から六十二年を経て、時代の要求に應えるために、英断を下したのだ。翌年の共学化に対応すべく、平成十四年はその準備が日々の活動に加えられた。男子トイレの設置など設備を改修した。新たに男子の指導をどうするか検討する職員会議も行われた。系列の秀英高校で研修を行い、

その発表なども行われた。

中学には、「観点別学習状況の評価」が導入された。従来の学習評価は、相対的になされていたが、これを絶対評価にするのが狙いだ。各教科を複数の観点から数値化し、それをもとに評価する、学習指導要領の達成度が、これによって客観的にはかれるようになった。

二、女子校最後の部活

女子校としては、平成十四年が最後の部活となった。前年同様、全国で古豪と呼ばれる部の活躍の一方で、ソフトテニス部などの活躍も目立った。主だった戦績を挙げる。

〈中学校〉

新体操部：県総体優勝、関東大会第二位

〈高校〉

バスケットボール部：インターハイベスト八、国体ベスト四、ウィンターカップ三位

ハンドボール部：インターハイベスト八、国体ベスト八、選抜三位

ソフトテニス部：個人出場関東大会三位、全国選抜大会二年連続出場

体操競技部：インターハイ個人出場

新体操部や体操競技部の戦績が徐々に上昇しつつある。翌十五年度からは、男子の部活も多数創部される。

書道研究部：大東文化大学主催全国展条幅・半紙の部推薦賞、平成十四年度毛筆検定一級合格者輩出、国

際高校生選抜書展南関東地区優秀賞

バトン部：平成十四年度関東大会トワリング部門銀賞

部活動が盛んな学校は多いが、運動部と文化部の両方で有力部を有する学校は少ない。

この状態の道筋をつけたのが、故伊藤一郎先生であった。

三、巨星墜つ

平成十五年、三月九日午前四時二十三分、伊藤一郎理事長がご逝去された。

その場に立ち会った久松英壽校長の「言の葉」の言葉を借りれば、「時ならぬ風に散る桜花のごとく」逝去された。その温容なお人柄を表わすかのような、静かな最期であられた。

第十三節 共学化一年目

一、故伊藤一郎理事長を偲ぶ

平成十五年三月九日に伊藤一郎理事長がご逝去された。初代伊藤友作先生がご尊父であられた。昭和十七

年から、昭和学院の前身、昭和女子商業学校にて教鞭を執られた。昭和三十六年に学長・校長に就任された。ご尊父が亡くなられ、昭和四十年から理事長も兼任された。

御活躍は枚挙に遑がない。千葉県私立中学高等学校協会会長、日本私立中学高等学校連合会副会長などを務められた。市川市教育委員会の要職も十一年間務められ、教育界全体のために力を尽くされた。

学院内部の改革では、昭和四十二年幼稚園を開園、五十八年には秀英高等学校を、六十年には同中学校を開校した。特に、秀英高等学校を開校するにあたって、学力重視の学校にしたい、とのお考えであった。部活の昭和学院、学力の秀英、というモデルを開拓し、育て上げたのは伊藤一郎先生であった。

多大な功績に対し、数度にわたる文部大臣表彰、厚生大臣表彰、藍綬褒章、勲三等瑞宝章などを受章されている。

内部でも生徒、教師、ともに慕いする者が多くいた。「言の葉」五十五号にある、元司書教諭で同窓会会長として、本学院に長年ご尽力されていた齋藤紀子先生の文章を引用する。

「中学・高校時代から『一郎先生』と呼んで親しんでいた、前学院長のご逝去から、早や一年が過ぎようとしています。（中略）同窓会に対しても温かなお心遣いを頂き、定期総会には必ずご出席下さり、卒業生と親しげに談笑している姿が印象的でした。教え子の一人一人をよく覚えていらっしゃるのには驚かされたものです。中学生から母校の司書教諭として、半世紀近く身近で接してきた先生には、感謝の気持ちしかありません」

生徒と教師、教師と尊敬する上司、伊藤先生が慕われていたことがよくわかる。もっと身近にいた、久松英壽元校長の、伊藤一郎先生との逸話を次に引用する。引用は齋藤紀子先生と同じ「言の葉」五十五号である。

「先生は職務に対しては大変厳格であった。しかし、職務をはなれると個人的にはとても心温かな優しいお人柄であった。(中略)私は、先生から囲碁やゴルフの手解きを受けたが、何一つ大成できず申し訳ないと思っている」。教師がサラリーマン化していると言われて久しい。故伊藤一郎先生は、まさに個人の時間を割いて、教育のことを考え、後進を育てることに情熱を傾けていらっしやった。

昭和学院はトップに立つ者の思想や性格が、学院全体に反映される。伊藤一郎先生の時代の昭和は「躍動」と表現される。

まさに一時代を築き上げ、牽引してきた巨星が不意に瞬きを止めた。

二、偲ぶ会

三月十三日には告別式が行われた。先生の亡骸を乗せた黒塗りの車が、先生が全精力を傾け育て上げた、昭和学院の周囲をまわった。学院には半旗が掲げられた。先生が乗られた車が過ぎゆくのを、幼稚園から短大までの全校生徒が、お別れを惜しむように、合掌し見送らせていただいた。

告別式に続き、縁のある人々にご臨席いただき、「偲ぶ会」が、四月二十六日に、本学院大講堂で執り行

われた。

元法務大臣白井日出男氏を發起人に、県内外から多くの方々にご出席いただいた。

スクリーンには在りし日の伊藤一郎先生のお姿が映し出されていた。壇上のご遺影は、色とりどりの花に囲まれていた。会場は、声もなく静寂に包まれていた。

代表して、白井氏が追悼の言葉を述べられた。白井氏と伊藤先生の密な関わりと、伊藤先生のご人徳がよく窺える哀悼の言葉であった。両先生が膝を交え、教育を語ったという、在りし日の光景が目には浮かぶようであった。

令夫人からご挨拶をいただき、ご臨席の方々から献花を賜った。その後、伊藤一郎先生がこよなく愛した音楽が会場に流れた。先生のご偉業を偲びつつ、ご臨席の方々は今会場を後にした。

三、新時代の息吹

時は残酷である。悲しみにくれる昭和学院であったが、取り巻く情勢は寸時の余裕も与えてはくれなかった。この年、伊藤アヤ新理事長、久松英壽校長（副理事長兼務）を中心とした新体制がスタートした。

久松校長は情勢に対応すべく、就任された十四年度から多くの改革案



伊藤一郎先生を偲ぶ会

を企図した。久松校長の改革は、学院に活気をもたらした。

改革の大きな動きは三つある。それは男女共学化、特進コースの設置、フロンティアハイスクールへの参加である。

四、男女共学化とフロンティアハイスクール

昭和学院だけでなく、女子専門教育を行う多くの学校が選択を迫られた。

その対応は二手に分かれる。女子専門教育の継続と、共学化の二つだ。

本学院の共学化という方針は、生徒数の増加という形で、開始初年度から成果が現れた。男子学生の入学に対応できる設備の整備だけでなく、宣伝活動の強化などの努力が実を結んだものでもあった。市川市や周辺の人々の、共学化へのニーズが高かった証拠である。

平成十五年度から三年間、高校生の学習意欲・学力向上に取り組む地域を指定し設置されたのがフロンティアハイスクールだ。本校はその指定を受けた。その目的は多岐にわたる。

その充実のために、学外からも多くの講師を招いて、講義を聴いた。浦野東洋一先生による「教育改革の根本にあるべきもの」が十一月二十五日に、吉沢光雄先生による「〈数学〉試行錯誤を大切に」が翌十六年一月二十六日に行われた。また、十一月二十五日に研究授業がさまざまな教科で行われた。



共学化一年目の合唱コンクール

五、悲しみを乗り越えて

部活動も、伊藤一郎先生のご逝去という悲しみを乗り越え、実績をあげていった。平成十五年度の主な結果を書く。

〈中学校〉

新体操部：全国大会準優勝

体操競技部：関東大会出場

〈高校〉

ハンドボール部：関東高校大会第三位、選抜・インターハイベスト一六

バスケットボール部：関東大会第三位、総体第三位

体操競技部：インターハイ個人出場、関東大会六位入賞

新体操部は中学の団体競技で準優勝を収めたメンバーが、高校入学後高い実績を出す。

この年から、男子の部活として、野球同好会、サッカー同好会が運動部で始まった。

第十四節 共学化二年目

一、コンペ審査会終了

平成十七年度に、本学院は創立六十五周年を迎えた。その記念事業として、老朽化した視聴覚館を解体し、その跡地に「歴史と伝統に培われた教育環境にふさわしい本学院のシンボルとして後世に残る斬新なデザイン」の建物を建設することが決まり、その建設計画推進委員会が発足した。設計デザインは、千葉県建築士事務所協会に依頼し、提案コンペ方式により、本学院の象徴としてふさわしい建築物との評価を得た「東葛飾一級建築士事務所」の作品が最優秀作品に輝いた。内部の施設としては、中ホール・視聴覚メディアセンター・多目的会議室・学院並びに部活動の歴史的展示室・教育研究所・同窓会及び奨学会室を設置し、地域社会に密着する形であった。しかしこの伊藤記念ホール提案コンペは、新キャンパス計画の大々的な見直しのため、見送ることになった。

二、サッカーグラウンド完成

男女共学化に伴い、体育の振興を図るために、前年度から市川市奉免町に工事が進められていたサッカー

グラウンドが完成した。グラウンドの広さは約一、〇〇〇坪で、更衣室・二部屋・倉庫・男女トイレ・駐車場・駐輪場が完備されている。グラウンド内には陸上競技に使用できる八〇メートルのコースが四本あり、砲丸投げの施設もある。周囲には民家も少なく、自然に恵まれた素晴らしい環境の中にある。平成十六年五月二十二日（土）午後一時三十分より各関係者が出席し、グラウンド開きが盛大に行われた。

三、ホームステイ再開

昭和五十六年から毎年実施してきた海外教育研修は、平成十三年九月十一日、アメリカでの同時多発テロやイラク戦争により、中止を余儀なくされていたが、平成十七年度に二年ぶりに再開した。引率は関岡守先生を団長に、寺田先生、豊田先生の三名で、高一から高三まで四九名の生徒が参加した。研修期間は二十一日間、ステイ先は従前のサンフランシスコ郊外から、ワシントン州シアトルに変更し、自然環境に恵まれた郊外のカーランド、ボニーレイク、ピアラップの三地区で、午前中のスクーリングのほか、老人ホームの訪問、ワシントン大学見学など貴重な体験学習であった。

四、子供観光大使

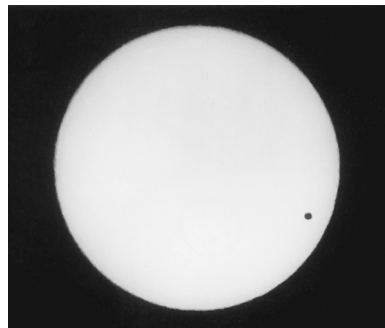
国土交通省関東地方運輸局・とちぎテレビ主催の第一回子供観光大使海外使節団に千葉県代表として、本学院より芳賀裕美さん（中二）・川崎智史くん（中一）が派遣されることになった。この事業は全国から一二

名が選抜され、生徒の在任している都市の観光をPRするものである。派遣先は中華人民共和国の上海市、杭州市で、期間は十二月二十五日（土）から三十日（木）の六日間である。主な活動内容は、学校や市役所訪問などの交流、現地イベントスペースなどで観光PR、また工場見学など多彩な活動が組まれていた。

五、金星の太陽面通過

平成十七年六月八日、梅雨空の午後に一三〇年ぶりに金星が太陽面を通過するという、大変珍しい現象が見られた。当日、朝のうちは太陽が見られたものの、午後には雲が厚くなり、自然科学部の部員たちは観測を諦めかけていたところ、雲の切れ間から太陽が見え隠れするのを見ると、屋上に駆け上がり撮影に成功した。太陽面をホクロのようにゆっくり移動して行く金星に、生徒は大変感激していた。

第十五節 「千葉きらめき総体」での昭和学院旋風



金星の太陽面通過

一、千葉きらめき総体

「輝きを胸に 夢をその手に 房総の夏」のスローガンの下、平成十七年八月一日から幕張メッセで行われた総合開会式で開幕し、二八競技種目別開会式が県内二八市町村を会場として行われた。総合開会式では、本校バスケットボール部主将の日下部知恵さんが全選手を代表して選手宣誓を行った。また今回は、総体初めての企画として、総合開会式が屋内で実施された。

本学院からは、五つの部活動より四六名の選手が参加する他、大会運営補助役員として数多くの生徒が大会の運営に携わることになった。

ハンドボール部

一回戦から順調に勝ち進み、迎えた準々決勝の対四天王寺高校戦、春の全国選抜大会では一点差負けを喫した相手。序盤からリードを保ち、一点差で勝利し、雪辱を果たした。続く準決勝の相手は、強豪の洛北高校（京都府）。選手の動きに本来のキレが見られず、二八―二二で惜敗。しかし、



堂々の全国第三位に輝いた。

バスケットボール部

日頃の練習の成果を遺憾なく發揮し、三回戦まで危なげない試合運びで勝ち進んだ。続く準々決勝は、大阪の薫英高校という名門校同士の対決となった。試合開始から選手に堅さが目立ち、ミスが続きリズムに乗れず、結局一点差で惜しくも敗れ、ベスト八に終わった。

新体操部

「大奥」をイメージしたといわれる豪華絢爛な曲調を、演技の中に取り入れるという魅力あるプログラムであった。難しい技を決めるものの痛いミスが響き、惜しくも入賞を逃がしてしまった。しかしながら、全国第七位という堂々たる結果であった。

体操部

団体競技での出場は二十二年ぶりであったが、惜しくも決勝進出はならなかった。しかし個人種目跳馬で



は大川玲奈さんが高得点を上げ、入賞を果たした。

ソフトテニス部

小林・田邊組が、相手に付け入る隙を与えない完璧なテニスで勝利し、二日目に進んだ。しかし、四回戦高岡商業（富山）戦では、前日の勢いはなく惜しくも一―四で敗退した。

二、初の県知事賞に輝く

書道研究部は、各展覧会において団体・個人共に、毎年優秀な成績を収めている。

特に高校二年生の則松綾夏さんが、県書き初め展中央席書大会で、本校初の知事賞（最高賞）を受賞した。則松さんは「書の甲子園」と呼ばれている国際高校生選抜書展でも準大賞を受賞するなど、その活躍は目覚ましいものであった。

三、大町総合グラウンド

共学化に伴い、男子生徒の施設の整備・体育振興を図るために、昭和学院大町総合グラウンドの改修整備が進められ、約一万坪の広大なグラウンド内に、硬式専用野球場とテニスコート三面が、このほど完成した。



大町自然公園に隣接し、周囲には民家も少なく、自然に囲まれた素晴らしい環境の中にある。

野球場は両翼九一メートル、中堅最深部一一〇メートルにフェンスが設置され、公式戦使用も可能な広さである。内野には四連の照明灯四基が設置され、日没の早い冬場でも十分活動ができるよう配慮されている。テニスコートは、人工芝に特殊な砂を混ぜ吸水性をよくしたもので、雨天時にも対応できるように施されている。照明灯二基、フェンス周囲には防風防砂ネットも設置されている。

両施設に加え、ハンドボールコートや多目的利用可能な敷地の整備、クラブハウス等の改修も今後予定されており、全生徒の活動に還元されるように配慮されている。

第十六節 「新キャンパス計画」実現へ

一、新地ニュージージランドに学ぶ

本校の海外教育研修は、昭和五十六年にアメリカ西海岸のサンフランシスコ郊外で実施して以来、平成三年の同時多発テロ事件後の二年間の中断を除き、継続して実施してきた。

そして、平成十八年度から政治的・経済的に安定し治安もよく、さらに素晴らしい自然環境に恵まれたニュージージランドのクライストチャーチに研修地を変更して実施した。

平成十八年は七月二十二日～八月十一日の三週間、参加生徒は三二名、英語研修学校で語学研修を受けながら、午後は盛りだくさんの課外活動に充実した日々を送った。

それ以後、毎年大変好評のうちに実施している。

二、千葉県私学教育研修集会

平成十八年十一月二十二日、第十八回千葉県私学教育研修集会英語科研修会を本校で開催した。「英語のコミュニケーション能力を高め、意欲的に英語学習に取り組む態度や国際的な視野を育てる」という研究目標のもとに、県内私立中学高校の先生方約五〇名が参加され、午前中は中学三年生の習熟度別授業・高校一年生のチーム・テイーチングによるオーラルコミュニケーションの授業・高校二年生の特進クラスの授業を公開し、その後研究討議を行った。参加された他校の先生方からは、生徒達が生き生きとして活動的な授業展開だったと好評であった。

三、新キャンパス計画の基本理念

本学院は、長い歴史と共に校舎等が老朽化したため、平成十六年度・十七年度と耐震検査を実施した。その結果、特に大きな問題はなかったが、本学院の将来を見据え小中高の全施設を建て替えることとなった。

設計・管理担当を㈱日建設計に決定し、同社と共に、学校法人理事会並びに伊藤記念ホール・小学校・中

学高校の各建設委員会を度々開催、また担当者とのヒヤリング等検討を重ねてきた。

校訓「明敏謙讓」の建学の精神にふさわしい環境であること、生徒や保護者に信頼され選ばれ永く愛され、子どもたちが豊かに学べる教育環境をめざした新たなキャンパスを創造する。特に、

- (一) 幼・小・中・高・短大が相互に融合し、一貫教育にふさわしい活性化しあうキャンパス
- (二) キャンパスの中央にはオープンスペースを配し、地域との共生を踏まえ地域に開かれた学校づくり
- (三) 樹木などの環境に配慮したエコスクール
- (四) 死角のない空間、セキュリティコア、高耐震、避難しやすい施設など、安全で安心なキャンパス
ということを念頭に置いたキャンパス計画をめざした。

四、「銀櫛賞」受賞

千葉大学主催の第九回数理学コンクールが行われ、本校の加賀俊夫君（高校二年）は荣誉ある「銀櫛賞」を受賞した。



加賀俊夫君「銀櫛賞」受賞

コンクールは、与えられた課題に対して実験や調べ学習を通して、六時間かけて解答を作成し、発想の豊かさやユニークさが多面的に評価されるものである。加賀君は、「水が滴下するときの法則について」と「ロケット燃料の消費のしかたと、飛行距離との関係について」という二つの課題に挑戦した。

第十七節 創立記念館移築工事「曳家工法」

一、理事長就任祝賀会

平成十九年六月二十一日、市川グランドホテルに於いて伊藤アヤ先生感謝の会並びに山本徹理事長就任祝賀会が開催された。当日は、会場に立錐の余地もないほど法人役員はじめ幼稚園から短期大学に至る奨学会理事・参事、教職員が多数出席され盛大な会となった。

伊藤アヤ先生におかれては伊藤一郎先生がご逝去なされた後、平成十五年度から理事長・学長にご就任されて早々より「魅力ある学校づくり」をめざして教職員の求心力となって学院を導いてこられた。そして先生の発想力と実行力によって「新キャンパス計画」が策定され、小学



伊藤アヤ先生と山本理事長

校校舎の新築工事着工を見届けられた平成十九年三月末日をもって理事長・学長を退任された。その後任として、山本徹先生が理事長に就任された。

会は、昭和学院中学校・高等学校副校長先生の司会のもと、短期大学学長の桑村典子先生による開会のことばによって始まった。はじめに発起人代表挨拶として、副理事長・昭和学院中学校高等学校校長久松英壽先生から伊藤アヤ先生のこれまでのご尽力に対する感謝の気持ちと、山本徹先生の理事長ご就任お祝いの言葉がのべられ、本会開催に至るまでの経緯が説明された。来賓代表の祝辞として、本学院理事である上野国彦先生と御園生碧樹様から、伊藤アヤ先生への感謝の言葉と、新理事長山本徹先生へのお祝いの言葉があった。さらに小学校校長大島清宣先生と幼稚園園長藤間信夫先生から記念品が贈呈され、花束が贈られた。伊藤アヤ先生からのご挨拶では、これまで昭和学院の発展のために職員とともに力を合わせてこられたことに対して感謝の気持ちのべられ、感無量の余り涙ぐまれる場面も見られた。また新理事長の山本徹先生からのご挨拶では、今後昭和学院発展のために力を尽くしていく旨がのべられた。

その後、本学院幹事の竹内清海様による乾杯の音頭と共に、グラスを手にしながら和やかな雰囲気の中で歓談が始まった。最後に秀英中学、高等学校校長山崎一男先生の挨拶によって閉会となった。普段は少ない学校間の交流も相まって、改めて学院の規模の大きさと今後の飛躍への期待を感じさせる夜であった。

二、曳家工法

昭和初期に建築された昭和学院創立記念館が、建物を解体せずに移動させる「曳家工法」で「引っ越し」した。この「創立記念館」は、本学院の創設者伊藤友作先生の自宅として昭和六年に千葉市の長洲町に建設され昭和十八年に学院内に移築された。築後七十年を経た建物である。

この建物は宮大工が手懸けたもので、和風建築であるが応接間の外観には白板や出窓の洋風建築を取り入れた、丁寧なつくりになっている。木造二階建て、延べ床面積約一三四平方メートルで、長年創設者一家が住まわれており、その後短大の学生寮として使われた時期もあったが、創立記念館として茶道部の活動に使用されたり、時間割編成等に使用されるなど学院のシンボルとして卒業生や関係者の心のふるさととなっている。平成十八年秋から始まった新キャンパス計画の工事に伴い、創立記念館は市民開放スペースに移築されることになった。

家屋は老朽化が進んでおり、解体すると現状に戻すのが困難であり、大正期の面影を残す歴史のある貴重な建物でもある。新キャンパス計画を設計施工する日建設と大成建設、そして昭和学院理事会が相談



「曳家工法」の様子

の上で曳家工法での移築を決めた。

曳家工法は、建物の土台部分を外し、建物を専用ジャッキで七〇から九〇センチ持ち上げ、地面との間に敷いた鉄製レールの上をゆっくりと動かしていく工法である。創立記念館の推定重量は約一三〇トンで、一日の移動距離は約二〇メートルである。当日は隣接する市道を通行止めにして、作業を開始。床下に潜り込んだ作業員が、親方の指示で鉄パイプを転がしながら、そろりそろりと家屋を動かした。平成二十年一月二十一日に幅約五メートルの市道を渡り、大講堂庭園まで二〇メートル移動した。同月二十五日までに第一段階の仮置場までの移動が完了した。その後は、移動の向きを何度も変えるなどの難しい工程を経て、最終的に小学校跡地に移築された。

第十八節 全中バスケットボール・新体操部全国制覇

一、全国制覇

平成二十年度全国中学校体育大会は、富山県・新潟県を中心とする北信越地方で八月下旬、各都道府県の代表チームが結集し行われた。その全国大会は、昭和学院のバスケットボール部と新体操部はみごとに全国優勝という輝かしい成績を残した。

バスケットボール部

昭和学院チームは、市川・浦安地区大会優勝、県大会優勝（二年連続九回目）、そして関東大会決勝進出を重ね、みごと七年ぶり九回目の全国大会出場を果たした。最大の難関は決勝進出をかけた愛媛県立松山市立南第二中学校との戦いで苦戦を強いられたが、後半でわが校が一気に逆転、五六―五五で九年ぶりの決勝進出をつかんだ。決勝の相手は東京成徳大学中学校。終始優勢に試合を運んだわが校が五三―三九でみごと初勝利の栄冠を勝ち取った。顧問となって十八年目で初優勝を果たした一関智子先生は「四六人の部員がそれぞれの役割を果たし、支えて下さった関係者の方々の方々の応援があつたからこそその優勝です。今後もさらに努力していきたいと思えます」と謙虚に語った。

新体操部

昭和学院チームは、本大会で昨年、一昨年と二年連続準優勝を収めてきた。「今年こそは」という願いと期待を一身に背負ったメンバー九名は、団体競技で一三・八二五の高得点をマークした。全国優勝の栄冠を手にしたのである。顧問の塩屋恵美子先生は「緊張感漂う独特な雰囲気



全国大会優勝

の中でも、選手たちは笑顔で最高の演技ができました。仲間を信じる気持ちと歴代昭和学院の伝統と誇りが後押ししてくれたものと思います。今後感謝の気持ちを忘れず、より一層努力を重ねてまいります」と今後の活動へも意欲的に語った。

二、創立七十周年記念事業

昭和学院新キャンパス計画は、平成二十二年九月末に完了した。その新キャンパス計画の中で、中学校・高等学校の第一期工事が平成二十年十二月二十二日に終了した。

中高校舎一期工事は、平成十九年九月より文化会館、五号館の解体工事から始まった。この一期工事では、日当たりのよい南側に二四室の普通教室と、一階に調理・被服・技術家庭科教室、美術・書道教室と保健室、二階から三階には二層図書室と自習室、情報教室、英語（CALL）教室を配置して利便性を考慮した。この二層のメディアセンターは今後の学びの中核となる。さらに、音楽室、社会科学教室と化学・物理・生物の教室を三階と四階に配置し、五階には第三アリーナを設置して、特別教室及び体育施設の充実を図っている。新校舎にはいくつもの特色がある。雨水の利用など環境への配慮をしたと同時に安全面にも力を注いでいる。新たなセキュリティシステムも導入された。各階廊下にはラウンジが設置され、木製のシンプルなデザインのテーブルと椅子が置かれている。教室は廊下に面する壁がガラスになり、教室が明るくなった。職員室内の設備も新しくなった。各先生にはノートパソコンが配られ、現代的なオフィスようになった。個

人情報の保護に配慮し、入退室の管理も始まった。職員室の雰囲気も一新した感がある。

平成二十一年一月に新校舎へ引越し、その後旧校舎本館と芸術館の半分、食堂、図書館、視聴覚館、そして中学校館の東側の解体を経て、第二期工事に入った。

平成二十年度第三学期の始業式より高校生全員が普通教室を利用し、特別教室については中学生と高校生がともに利用している。第二期工事は平成二十二年五月に完成した。

本学院のシンボルとなる伊藤記念ホールが平成二十一年二月二十三日に完成した。音響効果に優れており、天井の構造は音をダイナミックにはね返すと同時に大空間を支えている。五六〇名収容可能なホールを中心に、一五〇名利用可能な会議室、そして学院の展示室が整備されている。また、緞帳は昭和学院の建学の精神「明敏謙讓」の文字を幾重にも重ねた図柄で、色はホールの内装に合った落ち着きの中にも華やかさのある色合い、綴れ織（西陣織）の風合いを最大限に生かした仕上がりである。

今後、さまざまな式典や行事に活躍する場となる。

第十九節 新キャンパス計画完成

一、新校舎での一年目

平成二十一年度は、新型インフルエンザが全国的かつ長期的に猛威を振るった年であった。本学院もその影響を受け、学級閉鎖に始まり、学年・学校閉鎖という事態となった。また、学校行事も変更や中止を余儀なくされた。中学、高校の合唱コンクールや真間祭の一般公開の中止、中学三年の校外教育の日程変更などである。そして生徒朝礼や芸術鑑賞会など生徒が一堂に会する場合は全員マスク着用などの対策が取られた。また、本年度は、高校二年生での山陰・山陽への三泊四日の校外教育や中学二・三年生の職場体験などの新たな試み、高校三年生の進学実績の向上など明るい話題も多い年であった。

そして、平成二十二年三月に新校舎二期工事の教室棟が完成し、五月末には体育館棟が完成した。平成二十一年度は、井上俊彦校長の「新校舎というハードの面は素晴らしいものが完成した。来年度はソフトである生徒一人一人に期待したい。頑張ってほしい」という言葉で締めくくられた。

二、高校二年・三年の校外教育

平成二十一年度は、高校三年生が最後の長崎旅行を行った。また、少子化の影響から四年制大学・短期大学・各種専門学校の入学試験が早まる傾向にあり、それに対応するため高校二年生は初めて最後の山陰・山陽への三泊四日の旅行を行った。長崎の日程はほぼ前年通りであった。一方、初めての山陰・山陽旅行は、初日は新幹線に乗り広島へと向かい、広島平和学習を行った。被爆者の方のお話を聞くなど有意義な初日であった。二日目は宮島の世界遺産厳島神社の見学から始まり、錦帯橋を見学後、クラス別コースとなった。三日目はレンタサイクルで萩市内班別自主研修であった。各班で事前に調べた名所、旧跡を巡り、午後は、萩焼の手びねりに挑戦した。最終日は秋吉台の壮大な景色と秋芳洞の神秘的な情景に息をのみ、福岡空港へ移動後一路羽田空港へ向かった。平成二十二年度は、平成二十三年二月十四日より十八日の日程で二班に分かれての校外教育が予定されている。

三、新校舎での真間祭

平成二十一年度の真間祭は、新型インフルエンザの流行により、一般公開が中止され、十一月二日・三日の学内公開のみとなってしまった。しかし、この年の真間祭は完成間もない新校舎で行う最初の真間祭であった。そのため真間祭実行委員長の発案のもと様々な新たな試みがなされた。中学校館と温水プールの間の道路を通行止めとし、生徒の屋台や運動部の父母による屋台など盛況であった。

また、伊藤記念ホールではゴスペルコンサートが企画・実施された。公演したアノインティッドマス・ク

ワイヤーは「心のままに、感情のままに、透明な気持ちで歌う」ことをめざし、「感動の伝道師」と呼ばれるグループであった。父兄や地域の方々が大勢集まり、素晴らしい歌声に酔いしれていた。新校舎でも二階の生徒ラウンジの窓ガラスに「ステンド切り絵」を貼り、その前で弦楽部などの演奏が行われたり、各教室でも趣向を凝らした展示がなされたりして、わずか一日ではあったが、生徒はとても満足していた。来年度は今年以上の真間祭になることを期待したい。

四、四年制大学への進学実績の飛躍的向上

平成二十一年度の高校三年生は、特進クラスを核として入学時より三年間を見据えた進路学習システムが導入された。各教科と連携を図り、授業を充実させると共に七時間目の補習講座を有効に活用するなどの受験体制の強化が図られた。また、一般クラスでも上位者の伸びを期待して、二年次には進路別習熟度別編成による文系・理系選抜クラスが設置され、各自が目標の志望校に向かって努力することのできる受験環境の整備がなされた。その結果、国公立大学では、千葉大学・千葉県立保健医療大学へ合格した。また、超難関私立大学へ八名、難関私立大学へ五四名、中堅私立大学へ五五名が合格を決めた。延べ合格数では二〇〇名以上となり、前年度を遥かに超える成果を上げることができた。同年は特進・選抜クラスの生徒を中心に、一般入試で上位校へ果敢に挑戦し、学年一体の努力が実を結んだ年であった。

五、「新生昭和」のスタート

平成二十二年四月、高校三三二名、中学一三九名の新入生を迎えて新年度が開始された。新キャンパス計画二期工事完成に伴い中学生・高校生が同じ校舎で学ぶ「新生昭和」のスタートである。五月下旬にはメイシアリーナ・第二アリーナ・室内温水プール・武道場など、充実した新体育館も完成した。特にメイシアリーナは、九月から十月にかけて行われる千葉国体の女子ハンドボールの試合や十月二十四日の昭和学院創立七十周年記念式典、来年の三月には卒業式など多彩な行事で使用される予定である。更に部室棟の完成、グラウンドの整備などで新キャンパス計画は、九月十七日にめでたく竣工式を迎えた。